# 日本写真保存センター 3

撮影：植田正治「パパとママとコドモたち」1949年

日本写真保存センター設立推進連盟

社団法人 日本写真家協会

「日本写真保存センター3」目次


はじめに ―― 3
「日本写真保存センター」設立構想 ―― 4
「日本写真保存センター設立推進連盟」役員 ―― 8
「保存が望まれる写真」 ―― 10
山端庸介・影山光洋・菊池俊吉・渡部雄吉・三木淳・田村茂・木村伊兵衛・土門拳・渡辺義雄・濱谷浩・緑川洋一・小島一郎・吉岡専造・大束元・田中徳太郎・稲村隆正

「日本写真保存センター」の設立を望む（順不同）
目的実現に向けて ―― 森山眞弓 14
第一歩を踏み出す日本写真保存センター ―― 田沼武能 14
写真は後世の国民の財産 ―― 福田康夫 16
東京都写真美術館の歴史に学ぶ ―― 福原義春 17
「日本写真保存センター」の実現の意義 ―― 御手洗冨士夫 18
「日本写真保存センター」の発起人として ―― 俣木盾夫 19
「日本写真保存センター」実現を目指して ―― 宗雪雅幸 20
営業写真の貴重な資料を後世に ―― 奥田昇 21
恒久的な施設の早急な建設を ―― 安達洋次郎 22
「日本写真保存センター」の設立を望む ―― 吹田文明 23
「日本写真保存センター」の隠れた五つの意味 ―― 妹尾堅一郎 24
写真は、共有財産か、私有財産なのか
散逸の危機にさらされている大学の写真資料 ―― 福井勝義 26
「写真保存環境に関する規格」の内容を実現した
保存センター設置を ―― 久保走一 27
ネガは写真の始まりであり、
その一瞬が永遠につながるのだ！ ―― 細江英公 28
写真保存センター設立の意義 ―― 笠原美智子 29
ネガは貴重な「史料」 ―― 白山眞理 31
日本写真保存センター設立推進連盟発足によせて
「文化」の証し ―― 山下洋一郎 32
現代文化の書庫としての役割 ―― 入江観 32
「写真」は人類の宝 ―― 奥田明久 33
時代をとらえる真のセンターに ―― 黒部一夫 35
写真の生命力 ―― 多田亞生 36
日本の写真文化の発信地に ―― 小西治美 37
「日本写真保存センター」の設立を希求する ―― 早川与志子 39
カメラマンの黒子としての責務 ―― 三木啓光 40
待望の設立を祝う ―― 丹羽壽彦 41
アーカイブという知的欲望 ―― 田中光常 43
調査研究委員会の設置は慎重に ―― 川田喜久治 44
日本の写真文化遺産を永劫に ―― 熊切圭介 45
「文明の原像」を残す ―― 白川義員 46
今なら間に合う ―― 野町和嘉 47
未来への伝言 ―― 木村惠一 49
瞬間はもう戻らない ―― 坂田栄一郎 50
フィルムに記録されたイメージは文化資源 ―― 中村征夫 51
保存センターの意義 ―― 土田ヒロミ 52
個人での保存の限界 ―― 中谷吉隆 53
写真保存センターに期待して ―― 常盤とよ子 54
世界最古の写真は建築写真 ―― 富岡畦草 55
過ぎ去った時の記録は再現できない！ ―― 高井潔 56
「日本写真保存センター」設立賛同者一覧 ―― 山口勝廣 57
活動報告 ―― 58
広くみなさまのご理解とご協力をお願いいたします ―― 松本徳彦 60



発行＝社団法人日本写真家協会（会長田沼武能）　編集＝松本徳彦
平成十九年三月二十五日発行

# はじめに

事物を精緻にしかも忠実に記録する手段として「写真」が誕生したのは、今から約百七十年前のことです。以来この「写真」は、人々の暮らしの中で、記録、伝達、表現手段として大きな役割を持つようになってきました。

現実に生起するあらゆる出来事や、眼前に明滅するすべての事象を記録、表現してきました。それらは日常の文明や芸術、文化、科学、社会などの広範な領域に深く関わりながら、あるときは時代の目撃者として、あるいは人間、社会の記録者、洞察者として、膨大な数の「写真」を残してきました。

この夥しい「写真原板」がいま、撮影者の物故とともに散逸、消滅の憂き目に合っています。

そこで、私たちはこの「写真原板」を収集、保存し、活用することのできる施設「日本写真保存センター」を、多くの皆さまのご支援によって設立できることを切望しています。

「日本写真保存センター」では、時代を色濃く記録した「写真原板（フィルム、乾板、湿板等）」を、歴史、写真に係わる専門の委員によって選択し、収集・保存を図ります。収集した原板はデジタル化して保存する。と同時に利用、活用できるようにし、利用者から使用料を徴収し、収益を著作権者に分配できるようにしたいと考えています。

すでに「表現としての写真」に関しては、各地の美術館、博物館等で収集保存され、公衆に展示公開されているものもありますが、記録の基になる「写真原板」の収集保存は行われていないのが現状です。歴史資料としての「写真」の利用がますます増大しています。この機を逸することなく早急に「日本写真保存センター」を設立し、後世に役立てたいと願うものです。

# 「日本写真保存センター」の構想案

日本写真保存センター設立推進連盟代表　森山眞弓
社団法人日本写真家協会会長　田沼武能

「日本写真保存センター」の設立は、わが国の時代を色濃く記録した歴史的にも貴重な写真原板が散逸の危機に瀕している現状を、防止し保存管理、活用を図ることを目的に進めています。この要望を実現することは、わが国の歴史・文化を継承するためにも必要なことであり以下にその構想案を提示いたします。

**目的と意義**　日本における近現代を撮影した歴史的に貴重な写真原板を収集、保存、管理し、わが国の写真文化の振興、発展に役立てると同時に、社会文化の研究や　学術、教育、マスメディア等における利用促進を図り、もって国民文化の向上に寄与することを目的とする。
施設の設立は、写真界をはじめ、学術、教育、新聞、出版、放送などの文化・情報界などからの強い要望もあり、早急な設立が望まれている。

**調査と研究**　地域文化を記録した写真等の発掘と保存を図り、地域文化の振興、教育現場での活用を目指すための調査と研究を行う。
収集した写真資料の保存を行うためデジタル化技術の研究と開発を行う。

地域分散型の保存を図り、インターネットでの閲覧、利用のためのシステムの構築を図る。
大学・大学院との共同研究により、他分野との連携も図る。

**収集と保存**

時代を色濃く記録した数々の写真作品の原板（フィルム、乾板、湿板等）を収集、保存する。
当初は戦後期の一〇万点。最終的には一〇〇万点を目標とするが、すべての原板を、東京で保存することはせず、発掘した地域に分散保存し、インターネットを通して利用することを検討する。
収集、保存にあたっては、専門家による収集委員会を設けこれにあたる。

**管理と利用**

管理運営は独立した機関を設けて当たる。
収集した原板は、低温での管理とデジタルによる複製化を行い、利用に対応する。
原板からの写真複製やWebでの公開を通して、広報活動を行い利用の促進を図る。
利用にあたっては、利用者から使用料を徴収する。収益は著作権者に分配する。

**普及活動**

ホームページでの閲覧、広報誌等を通して行う。
出版、展示活動のほか、Webを利用した閲覧に重きを置く。
全国の保存施設とのインターネットによる情報の交換、利用の促進を図る。
収蔵原板目録の作成等と基本データの集中管理を行う。

**施設の規模**　交通至便な都心が望ましい。

収蔵庫　延べ一、五〇〇平方メートル
閲覧・展示室　延べ一、〇〇〇平方メートル
管理・事務室　延べ　八〇〇平方メートル
総計　三、三〇〇平方メートル
職員ほか　四～六名

## 収集を必要とする写真

**収集対象**　時代を色濃くとらえた写真のネガおよびポジフィルム（原板）。当面は物故作家の写真で、すでに印刷物等で公表されている写真を第一資料とし、その周辺までを含めた収集をする。
第一期、一九四五年から一九六〇年代までの、戦後の人々の営みや社会状況をとらえた写真。
第二期、一九七〇年以降と一九四五年以前の写真を段階的に収集・保存する。

**収集方法**　物故作家の遺族（著作権者）より、原則として寄贈、寄託または購入による収集を図る。
マスメディアを通して収集保存の必要性を広報し、広く公衆からの資料の提供、寄贈を受ける。
収集に当たっては、学識経験者による資料収集委員会を設け、収集対象作家及び写真の選定

を行う。

保存だけでなく、利用されることを前提にした収集、管理を行う。

利用は広く一般に開放する。印刷物、展示活動、学術研究などに活用する。

## 活用方法

## 調査・研究費

調査・研究・開発に関わる事業内容は以下の通り。

地域文化を記録した写真等の発掘を図るための調査費

収集した写真資料の保存を図るための調査および研究費

写真資料のデジタル化技術の研究・開発費

地域分散型の保存・管理に関わるインターネット構築のための調査費

資料閲覧、利用のためのシステム構築のための調査・研究費

調査研究は大学・大学院および企業との共同研究を図るための開発費

## 事務局の設置

日本写真保存センター設立推進連盟を、当面、社団法人日本写真家協会内に設ける。

学識経験者による「資料収集委員会」を設け、収集対象作家及び写真の選定を行う。

# 「日本写真保存センター設立推進連盟」役員（順不同）

代　　表　森山　眞弓（衆議院議員）
副 代 表　田沼　武能（社団法人日本写真家協会会長）
代表委員　細田　博之（衆議院議員）
　　鳩山　邦夫（衆議院議員）
　　福原　義春（東京都写真美術館館長）
　　斉藤　満雄（社団法人日本音楽著作権協会常務理事）
　　細江　英公（社団法人日本写真家協会会員）
発 起 人　河村　建夫（衆議院議員）
　　福田　康夫（衆議院議員）
　　与謝野　馨（衆議院議員）
　　中曽根弘文（参議院議員）
　　俣木　盾夫（株式会社電通代表取締役社長）
　　野村吉三郎（全日本空輸株式会社最高顧問）
　　小沢　健志（日本写真芸術学会名誉会長）
　　大西　　實（社団法人日本写真協会会長）
　　小野　茂夫（株式会社ニコン相談役）
　　鈴木　和夫（凸版印刷株式会社特別相談役）

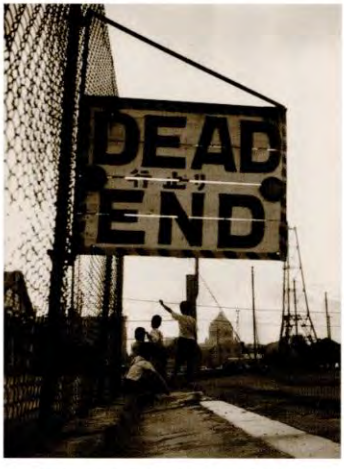
辻村　哲夫（独立行政法人東京国立近代美術館館長）
箱島　信一（朝日新聞社特別顧問）
本多　健一（東京工芸大学名誉学長）
御手洗冨士夫（株式会社キヤノン代表取締役会長兼社長）
石元　泰博（写真家・文化功労者）
長野　重一（写真家）
東松　照明（写真家）
藤本　四八（元社団法人日本写真家協会会長）※
芳賀日出男（社団法人日本写真家協会名誉会員）
田中　光常（社団法人日本写真家協会名誉会員）
長友　健二（社団法人日本広告写真家協会会長）※
奥田　　昇（社団法人日本写真文化協会会長）
梅原　　猛（国際日本文化研究センター顧問）
梅棹　忠夫（国立民族学博物館顧問）
福井　勝義（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
妹尾堅一郎（東京大学先端科学技術研究センター特任教授）

事務局長　松本　徳彦（社団法人日本写真家協会専務理事）

役員名簿は平成十八年五月、申請当時のものです。※故人

影山光洋「終戦の日の宮城前広場」1945年

山端庸介「原爆の長崎」1945年




渡部雄吉「デッドエンド」1950年

菊池俊吉「敗戦直後の銀座4丁目」1945年

## 保存が望まれる写真

土門　拳「近藤勇と鞍馬天狗」1955年

三木　淳「赤軍故郷に帰る」1949年

田村 茂「訴える」1951年

木村伊兵衛「本郷森川町」1953年

緑川洋一「白い村―石灰工場の人々」　1954年

小島一郎「津軽」1959年

濱谷　浩「あわらの田植え」
1955年

渡辺義雄「伊勢神宮」1953年

## 保存が望まれる写真

稲村隆正「ジプシー・ローズ」
1954年

吉岡専造「鳩山首相退陣」
1956年

田中徳太郎「よろこび」
1964年

大束　元「東京雪景」1951年

# 「日本写真保存センター」の設立を望む（順不同）

## 目的実現に向けて

日本写真保存センター設立推進連盟代表　森山眞弓（衆議院議員）

「日本写真保存センター」の構想がいよいよ実現できそうな見通しになって来ました。財政事情の厳しい中ではありますが、平成十九年度の文化庁の予算案の中に調査費が計上されたのです。　度と撮ることのできない貴重な写真原板の保存が如何に大切かということをくり返し、皆で説明、陳情した事が効を奏したと思います。何人かの国会議員の皆さんにも応援していただき、感謝にたえません。

この調査費を活用して十分かつ手際よく下準備をして、できるだけ早く立ち上げなければなりません。　日も早くしないと劣化はどんどん進んでしまい、取り返しがつかないことになります。やっと最後に間に合ってよかったねといえるように実行したいものと思います。

ぼう大な仕事を急いでしなければならないという大きな試練ですが、関係の皆様のご奮闘を心からお願い致します。

## 「第一歩を踏み出す日本写真保存センター」

日本写真保存センター設立推進連盟副代表　田沼武能（社団法人日本写真家協会会長）

先日、ある女性週刊誌から、戦後新橋駅前の路上で靴みがきをしながら　人の子どもを育てた女性が八〇

才でいまも仕事を続けている。この女性のドキュメント記事を取材しているので、ぜひ当時の新橋駅界隈の話を聞かせて欲しいと記者が訪ねてきた。私の記憶に間違いがなければ、当時その母子を先輩のＩ氏が撮影していたことを思い出し、早速Ｉ氏の未亡人に電話をしたところ、自宅を処分してマンションに移った時に、主人の撮ったフィルムは廃棄してしまったとの返事であった。戦後の日本人の生活を証言する上で貴重な写真の原板（フィルム）が消えてしまったことに、私は心の痛む思いであった。

日本写真保存センターの構想はＪＰＳ（日本写真家協会）内で話になっていたのだが、現実のものになったのは昨年の　月であった。森山眞弓（財団法人日本カメラ財団理事長、衆議院議員）先生をはじめ与謝野馨、細田博之、鳩山邦夫、河村建夫、中曽根弘の国会議員の諸先生に東京都写真美術館館長代理、斉藤満雄（社団法人日本音楽著作権協議会常務理事）など写真に造詣の深い方々十七名にお集まりいただき、ご相談の結果、推進連盟を結成して代表を森山眞弓先生にお願いすることにした。

早速森山眞弓代表に松本徳彦と私が文化庁に同行して写真保存センターの必要性、緊急性を説明申し上げた。その後、芸術文化課の担当官への説明もたびを重ねご理解を得て、文化庁は日本写真保存センターの設立のための調査費を平成十九年度の予算に組み込んでいただくことができた。このことは私たち推進連盟にとって明るいニュースであり、日本写真保存センターの設立に向け第　歩が踏み出せたことになる。

この　月には文化庁の担当官と今後の調査方法、スケジュール、予算の配分等について指導をいただき、実務を進めることになった。

文化庁の調査費が決定したので、これから写真関係の各団体及び企業に呼びかけ、このセンターの運営に参加するようお願いしなければならない。もちろんＪＰＳ　団体でこの大事業は出来ない。写真界が　致協力して推進して行かなければ設立して運営することはできない。

日本は世界　、　を誇るカメラ機材の生産国であり、五〇〇万人ともいわれる写真愛好家がいるといわれる。　人百円の募金が頂ければ五億の浄財が集まることになる。これは机上の計算であるが、沢山の写真愛好家の支えによって時代を記録した貴重な写真作品が後世に伝え残すことができればすばらしいことだと考える。文化を支えるには沢山の方々の協力が必要であり、写真保存センターが磐石な文化事業になるのだと思う。また、これを成功するのはひとえに写真人の情熱にかかっているといえよう。

## 写真は後世の国民の財産

福田康夫（衆議院議員）

記録を写真で残すことは、後世の国民への財産となる。

国も、国の財産を残すために記録や資料を集め、保存し、国民の供覧に資することになっている。それを司る役所は国立公文書館であり、主要国はそれぞれ国立の公文書館（ナショナル　アーカイブス）を持ち、国の形、国の歴史を残すため、その充実に努めている。

わが国の国立公文書館は重要な歴史的資料を保有する貴重な存在だが、その規模は小さく、保存資料、種類、保存スペースなど主要諸国と比較して、残念ながら見劣りする。その範囲も限られ、政府が作成した記録や資料が中心だ。国の形や歴史を正確に伝えようとするなら、政府の公式記録や文書だけでなく、その時々の国民の様子なども対象にしないと本当の姿は判らないし、総体としての事実を正確に伝えないことになる。

写真は、その時どきの人間の生き様などを多面的に確認し、理解することが出来る、まさに歴史資料だ。

米国の公文書館は内容が充実しており、日本の地方都市の戦災時の写真を沢山見つけたことがある。今は我が国の公文書館で写真まで保存する余裕がないが、いずれは国がしなければならない。

その場合、民間と国では選択　保存のコンセプトに違いがあるし、全てを国に任せて良いものでもないだろう。その意味でも写真保存センターの意義は大きく、頑張って頂きたい。

## 東京都写真美術館の歴史に学ぶ

福原 義春（東京都写真美術館館長）

何よりも「日本写真保存センター」設立運動が具体化し、世の中に見えるようになったことは誠に素晴らしいことだと思う。

時代前に遡ると、東京都写真美術館設立のために日本の写真界をリードして来られた先輩たちが情熱を傾けて運動された。開館前に体系的なコレクションの方針が決定されて収集がスタートした。その結果は日本で最大の写真と映像の専門美術館が誕生し、世界にも誇れる存在になったのだ。

東京都写真美術館は　〇〇六年に正式開館から十周年を迎え、自前のコレクション作品だけで四部の写真の歴史展を開催することができたのはご承知の通りである。しかしこの間に写真の世界では予想もできないようなことが次々と起きて来た。第　に銀塩感光材料を用いるそれまでの写真技術からデジタル技術への転換である。

それが結果として従来型の銀塩フィルムや印画紙の生産打ち切りに早々とつながるとは想像も出来なかったことだ。更にはかつての銀塩印画紙に残された作品がもはやニュープリントという方法によって再生する

ことも不能という現実につながった。そしてヴィンテージプリントと称されるような写真作品の希少性が高まり、市場価格が高騰するのは当然である。そこにまたオークションという価格決定のメカニズムの普及が輪をかけることになった。

東京都写真美術館が収蔵予算を凍結されるまでに収集した二万三千点にのぼるコレクションに含まれる作品は今日では入手が殆ど困難になるか、或いは価格が急騰することになった。それがこの美術館のかけがえのない財産になっているのは今から僅か二十年前になされた設立運動のおかげなのである。

この歴史に学ぶなら、急速な技術の転換期に写真原板を中心とする保存センターの設立がいかに急務であるかお判り頂けると思う。

それはまた同時に写真による日本近代史の確認のための貴重な運動になるのである。

## 「日本写真保存センター」実現の意義

御手洗冨士夫（キヤノン株式会社会長）

わが国は世界有数の写真国です。ダゲールによる銀板写真の発明に遅れること二十三年、幕末一八六二年に上野彦馬が長崎、下岡蓮杖が横浜に写真館を開いたのが、日本写真史の嚆矢とされています。明治後期には現代に繋がる写真関連企業の母体が生まれ、戦後は高性能・普及価格化、電子化、自動化、デジタル化と、不断のイノベーションを重ね、世界の先頭に立ってきました。

この間、多くの写真家が表現技術の研鑽に心血を注ぎ、その結晶は二度と還らぬ時代の雄弁な証言として、また心を洗う芸術作品として今日、国民の大切な共有財産となっています。こうした産業・文化環境がまた

多くの写真愛好家を育む土壌ともなってきたのです。

災害に遭遇した人びとが咄嗟に抱え出たのは家族のアルバムだった、という報道がありました。この報に接し改めて思うのは、愛好家のみならず「人間」にとって写真という記録が持つ普遍的な重みでありましょう。

近年、写真を展示するギャラリーや美術館も増加し、大いに賑わいを見せています。弊社グループにおきましても、日本国内ではキヤノンマーケティングジャパン(株)がギャラリーの展開に加え、貴重なオリジナルプリントを収蔵・展覧する「キヤノンフォトコレクション」をささやかながら続けております。

こうした活況の半面、歴史的に重要な写真作品は保存が危ぶまれる状況です。とりわけ、急を要する原板の保全は企業、法人、個人の広汎な参画はもとより、国家レベルでの取り組みが必須であります。さらに私は、原板に息づくかけがえのない文化資産がより長く後世に伝えられ、より広く共有されるよう、今日の高度な技術の果たす役割に大きな希望を抱いております。「デジタルと映像」に企業基盤を置くキヤノンとしてもこのプロジェクトを支援したいと考えます。「日本写真保存センター」はわが国の文化価値を向上せしめ、ひいては国際交流にも寄与するものと確信し、その実現を切望するものであります。

## 「日本写真保存センター」の発起人として

俣木盾夫（株式会社電通代表取締役社長）

私が「日本写真保存センター」の発起人となりましたのは、平成十八年の電通年賀会で(社)日本写真家協会の田沼武能会長とご挨拶を交わしたのがきっかけでした。その折りに田沼会長の写真集を愛蔵している事、大学生時代に写真クラブに所属していた事などをお話し致しました。

後日、田沼会長から「日本写真保存センター」の『日本における歴史的な写真原板を収集・保存・管理し、

我が国の写真文化の振興、発展に役立てると同時に社会文化の研究や学術・教育・マスメディア等における利用促進を図り、もって我が国の文化の向上に寄与することを目的とする。』という意義を述べられたお手紙を頂戴し、私も写真愛好家の一人として、また、広告会社の社長としても大変共感し、発起人とさせていただくことと致しました。

私は、広告作品は時代を反映する映像コミュニケーションであると考えております。カレッタ汐留にある「アド・ミュージアム東京」は、(財)吉田秀雄記念事業財団が運営する公益法人の広告美術館ですが、そこでは、江戸・明治・大正・昭和・平成の広告作品の収集・保存・管理し、作品の展示をしております。また、広告作品を歴史的にも文化的にも大切な財産としてアーカイブ化も行っており、当社も、同財団を通じ、そうした活動を一貫して支援をして参りました。

そのような理由からも、私は貴重な写真原板の収集・保存・管理を行う「日本写真保存センター」の必要性を感じ、早期の設立を望んでおります。又、設立が実現されました際には、保存された貴重な写真を多くの方にご利用していただけるよう願っております。

## 「日本写真保存センターの実現を目指して」

宗雪雅幸（社団法人日本写真協会会長）

日本に写真保存センターを設立することに異論を唱える向きはほとんどないと思います。

フランスに国家の公共機関として「写真文化遺産保存局」があるように、文化国家が写真文化遺産を重要なものと位置づけるのは当然のことです。ただ残念ながら、わが国には膨大な写真文化遺産があるにもかか

わらず、しかも益々その数を増やしているにもかかわらずそれを整理し保管し活用し、後世にまでその遺産を残し伝えていく体制は整っていません。社団法人日本写真家協会の音頭のもとにこの活動が起こり推し進められていることに深い敬意を覚えます。

日本写真協会は一九五二年の設立以来、会員各位によって写真機材の開発進歩、写真文化の振興、写真を通しての国際交流が進められ、大きな成果を収め、世界有数の写真大国を築く役割を果たして来たことに大きな誇りを覚えています。この絢爛として咲いた写真文化の花を後世に伝え、整理し、いつでも必要な時に参照、利用されなければならないのです。それをしなければ貴重な文化遺産は消失すると思います。近年飛躍的に進歩したデジタル化技術は写真文化遺産の整理、活用という点で大きな威力を発揮することは疑いありません。地道な活動と努力によってこれらを推し進めなくてはならないと思います。文化は消耗の中では育たないからです。百年以上に及ぶ写真文化遺産の保存に今、光が当たりつつあることに大きな期待を寄せつつ皆で力を合わせてその実現に邁進したいと思います。

## 営業写真の貴重な資料を後世に

奥田　昇（社団法人日本写真文化協会会長）

写真館の歴史は、文久二年（一八六二年）長崎で、上野彦馬が上野撮影局を開業、同時に下岡蓮杖が横浜で写真館を開業。日本の写真館が創業して既に一四五年に成ります。又、二年後の一八六四年には函館で木津幸吉が写真館を開業致して居ります。その後、全国各地で写真館が続々と開業しました。

当時の写真師は、人像写真はもとより、世相風俗の様々な記録を忠実に撮影して居りました。現在でも、

創業百年を超え、四代目、五代目と継承して、立派に営業をしている写真館が、全国に存在して居ります。営業写真館の団体としては、昭和二十三年（一九四八年）文部省（現文部科学省）の認可を受けた社団法人日本写真文化協会が、現在、全国の会員約三、五〇〇人で組織されて居ります。

昭和六十一年（一九八六年）に社団法人日本写真文化協会主催、文化庁、朝日新聞の後援で、「日で見る一〇〇年写真館展」を有楽町の朝日ギャラリーで行いました。内容としては、写真館が開業されてから、第二次世界大戦までの、営業写真家による作品、又、使用された機材や材料などの展示を行いました。その時、写真館展の担当委員の一人として、多数の写真館を訪問した際に感じた事ですが、乾板が、茶箱の中に整理されていたり、大小の写真がダンボールの中に、ばらばらに入れてあったりと、様々でした。乾板、フィルム等の保管状態が、其の後二十年経った現在、どの様になっているでしょうか…

最近、後継者が無く、廃業する写真館が増えて居ります。貴重な資料を後世に残す事こそ、我々の責務であると思います。早期の写真保存センターの設立を希望致します。

## 恒久的な施設の早急な建設を

安達洋次郎（社団法人日本広告写真家協会会長）

写真原板が保存される。素晴らしい事業です。

私たち広告写真家の仕事は、請負写真、広告制作チームの共同作業と云われていますが、元を正せば根っからの写真好きの延長なのです。従って、感動、印象に残るオリジナル写真を持っている広告写真家は沢山います。

これらの写真原板がアーカイブとして日本写真保存センターに保存されることは、ひとり私のみならず当協会の多くの会員の夢でした。

写真という物、これほど多くのコンテンツを含んだ表現物はこの世に稀有なものといえるでしょう。主観的観察からは写真作家の心を表現した芸術的な価値をもち、一方では客観的観察から写真情報の読み取る等の科学的な価値があり、写真は一掴みに出来ない価値をもっています。

また、これがアーカイブとなれば、写真機材の進歩の道程やその時代時代の写真家が技術を駆使した苦労も偲ばれます。このような貴重な労作の写真原板を保存・管理する立派な施設の設立に関わる調査研究費が文化庁で予算化され、調査が始まることは喜ばしいことです。

この「日本写真保存センター」の設立にご尽力された多くの方々のご努力に感謝しています。

この上は、恒久的な施設の早急な建設が望まれます。写真人がこぞって協力する体制を作り、皆さんと共に推進して行きたいと思います。

## 「日本写真保存センター」の設立を望む

吹田文明（社団法人日本美術家連盟理事長）

今日、写真の記録と芸術性は社会常識であるから、私は当然、国立近代美術館、日本フィルムセンター、国会図書館でその収集、保存、展示がなされているものと考えておりました。

「日本写真保存センター」設立賛同を求められて、驚き、改めて、その認識の無さと不明を恥じております。又、当事者が動かなければ社会常識も具体的進展を見ないという行政にもあるのかと思います。

フィルムセンター設立の折り写真は問題にならなかったのか、ビデオはどうなっているのか、門外漢の私でも心配になってきます。と言うのは他界する画家達の離散する作品の問題を私達、日本美術家連盟も抱えているからです。全国に三百余りの国公立美術館が有りながらです。ましてや、よりデリケートな保存の必要な写真の専門的保存センターが無かったのが不思議。一日も早い設立が必要でしょう。後れればおくれるほどその一日、一日に貴重な日本の文化財が失われていくことを考えると早い設立と行動が望まれます。写真の記録であり芸術である大切な文化財の消失をくい止める為にも、日本写真保存センターの一日も早い設立を痛感する次第です。

## 「日本写真保存センター」の隠れた五つの意味

妹尾堅一郎（東京大学特任教授）

貴重な写真は、アナログの銀塩写真のまま保存しておくことは難しい。そこで、写真をデジタル化した上でアーカイブすることになる。その時、本センターの持つ意味は、単なる収納拠点にとどまるものではない。実は一般的に考えられているより、はるかに多様だ。

第一、本センターは「写真のデジタル化技術の先端拠点」となる。戦後の貴重な写真のアーカイブ化から始まるにせよ、一方で褪色が始まった幕末から明治期の写真（それも湿式からガラス乾板等も含む）といった、スキャナーですんなりデジタル化できない難物も多数でてくるはずだ。その時、本センターは、世界的な写真の復元・保存技術開発の場と機会を提供するだろう。

第二、本センターは「グリッドの先端拠点」となる。センターは物理的な収納拠点ではなく、また巨大な

データ格納庫を持つサーバでもない。むしろ各地にある自律的サーバのネットワーク・ハブとして機能する。その時、本センターは「グリッド」という日本の誇る先端技術が活躍する場と機会を提供するだろう。

第三、本センターは「新しいネットワーク著作権制度の模索拠点」となる。すでに世の中は「Web2.0」時代に突入した。今や多くの映像が〝YouTube〟等に自由に（あるいは勝手に）アップされる時代である。それを踏まえたセンターの運営構造やシステム設計はもちろんのこと、近未来を見通した著作権のあり方を検討せざるをえない。その時、本センターが従来の議論を超えた新しいネットワーク著作権制度を試行する場と機会を提供するだろう。

第四、本センターは「新時代の知的財産のリソース」となる。今や多くの人々がネットワーク上で知的財産の共有と使用を試みるようになった。「主客融合」「集合知」の世界で、写真は作品であると同時に、確実に多くの人を触発し次の知的財産を創出する「知的資源」になるだろう。その時、本センターは過去の遺産を通じて未来の資産づくりを行う場と機会を提供するだろう。

第五、本センターは「産学官公民連携による文化財アーカイブの実証モデル」となる。文化財アーカイブ化はまだ緒に就いたばかりである。その運営モデルについてもまだ試行錯誤の段階ではあるまいか。その時、本センターは、上記の多様な意味を包含しつつ、産学官公民の連携によって文化財を扱う、その実証モデル試行の場と機会を提供するだろう。

このように、本センターは写真保存の意味だけではなく、多様な意味・意義・位置づけをなしうる可能性を秘めている。つまり、日本の総合力を次世代の人々に託す場と機会を提供するのである。その設立に大きな期待を寄せたい所以である。

# 写真は、共有財産か、私有財産なのか―散逸の危機にさらされている大学の写真資料―

福井勝義（社会生態学）

私たちを支えてくれたものは、いうまでもなく過去の遺産である。いまの若い世代に、過去の遺産に対する誇りはあるのだろうか。写真は、どんな小さな子が目にしても、心に響くものがある。そんな単純なことを、どうして私たちは無視するのか。

ほとんどの研究者は、国家もしくは自治体の予算なくしては存在しえない。年間あたり何百万から何億という研究予算は、国家に申請し、しかるべき審査・手続きのもとに認可される。私たちは、その予算のもとで実行計画をたて、カメラやフィルムなど研究を遂行していくうえで不可欠な備品や消耗品を入手することになる。

いちど「プロの研究者」として採用されると、それぞれの大学・研究機関の基準に沿った生活費や研究費はある程度保証される。その予算内で、「好きなだけ」の写真を撮り、ある目的に沿った「研究課題」に没頭することができる。さらに、いわゆる科学研究費に代表される「競争的資金」を獲得すれば、三～五年間は自分の研究目的に邁進することができる。じつにぜいたくな「環境」である。

ただ現場では、多くの写真家の方々と同じように、研究者は特定した研究課題の探求に命をかける。そうした国家・自治体の予算に支えられてきたにもかかわらず、ほとんどの写真を含む調査資料は、本人の退職とともに、自宅に持ち帰らなくてはならない。本人の生涯をかけた遺産は、やがて孫の世代に、そしてこの世界から消滅していく。

公的予算にもとづく成果は、「自宅に」？　三十年、五十年、さらに百年にわたる成果は、どうして公的

機関で保存され、未来の世代に継承されないのか。恩師をはじめ先人たちの偉業をかいま見ながら、不思議でならない。国家は何を蓄積し、次世代に継承しようとしているのか。

## 「写真保存環境に関する規格」の内容を実現した保存センター設置を

久保走一（千葉大学名誉教授）

写真保存センター設立の意義は論ずるまでもなく重要で、多くの識者によりその必要性が強調されている。写真は極めて記録性が高く資料としての価値が高いが、化学反応により形成されるもので、絵画や文書と比較すれば、かなり脆弱な画像である。したがって、写真を資料として保存するためには、温度・湿度・包装材料など保存条件を適正に整える必要がある。写真画像の保存に関する適正な環境条件の規定についてＩＳＯ（国際標準化機構）及びそれに対応するＪＩＳ（日本工業規格）は、「長期保存条件」を「永遠の価値を持つ記録情報の保存に適した条件」と定義し、各種方式の写真画像について温度・湿度・包装材料などを詳細に定めている。これらの内容は、規格改定ごとに厳格化される方向にあり、規格内容を実現するためには精度の高い大型設備が必要である。これらの保存条件は、主なものでもＩＳＯ及びＪＩＳそれぞれ五規格がある。この長期保存に関する環境条件を実現するためには、設備及び保守に多額の費用を要するであろう。

現状では、これらの長期保存環境を実現できている写真保存施設は残念ながら少ない。完全な保存環境とそれを活用できる専門家なしでは、せっかく収集した写真も不適切な取り扱いにより、劣化が促進されるなど逆効果となってしまうであろう。規格は、貴重な写真資料を損傷した過去の痛みを分析し、それを繰り返

さないために、技術的に細部に亙り条件を規定したものである。

ここに「日本写真保存センター」の設置を切望すると共に、設置されるセンターを後世に対して意義あらしめる為には、前述の内容を持つ設備および写真保存専門家の確保に充分な予算措置が文化行政として配慮されるよう、衷心よりお願いする次第である。

## ネガは写真の始まりであり、その一瞬が永遠につながるのだ！

細江英公（写真家・清里フォトアートミュージアム館長）

写真は一瞬を捕まえることができる唯一の技術である。八千分の一秒なんて目で捉えられるだろうか。そんな瞬間を固定させ、目で見ることを可能にさせるもの、それは写真術以外にはない。しかも、それは幼稚園児にでもできる凄い術だ。

さて、そんな魔術的な技、その実用的な写真術であるダゲレオタイプ（フランス）とカロタイプ（イギリス）が同じ一八三九年に発明されて、今年で一六八年が経った。写真術の今日的重要性は言うまでもあるまい。新聞、雑誌、家庭アルバムは誰でも知っている。最近では写真ギャラリーの数は北海道から沖縄までいくつあるだろう。さらに、東京都写真美術館をはじめ、普通の美術館でも写真展を開いているし、しかも美術館だからといって必ずしも「芸術としての写真」ばかりでなく「ドキュメントとしての写真」もあり、写真のもつ幅広い表現世界は単に「美術」だけのものではない。

「複製芸術」としての特性を持つ写真は「一点しか存在しない美術品」とは異なり、原理的には一枚のネ

ガから無数のポジが生まれるという特徴を持っている。しかも、同じく原理的には、同じネガから無数の違うポジが生まれるという性格がある。このことは写真家ならばだれでも知っていることなので説明を要さないが、少しばかり説明しよう。そのことをアメリカの著名な写真家・アンセル・アダムズは次のように言っている。「ネガは楽譜で、プリンティング（焼付け）は演奏だ」、つまり、楽譜の演奏は演奏家によって微妙に違う。それは楽譜を如何に解釈するかということで、演奏の質が違うということである。しかし、音楽と違うところは、音楽の演奏は楽譜を見なくても演奏できるが、「写真ではネガがなければ絶対にプリント（演奏）が出来ない」ということである。

これは、ある写真店でプリントしてもらったら、お店が違うと少し色味が違うことがある経験をしたことがあるはずだ。同じ自動プリンターでも違うのだから、まして手で一枚一枚焼付けするときに違いが出るのは当然で、ならば、その違いを意識的にやることが「演奏」ということである。それは、上手、下手の問題ではなく、感性、感覚、技術の違い、ネガの持つ内容を如何に解釈して焼付け（演奏）するか、という問題である。しかし、先ほども触れたが、写真に「暗譜」はないのである。つまり、ネガがなければ焼付け（演奏）ができないということ、これこそが、写真保存センターでの「ネガの保存」ということなのだ。

## 写真保存センター設立の意義

笠原美智子（東京都写真美術館事業企画課長）

長年、東京都写真美術館の学芸員をしているので、多くの写真家の方から様々な相談を受ける。その中で多いのが、自分の死後、ネガを美術館で引き取ってもらえないか、というものである。それがどんなに高名

な写真家の方であろうと、たとえわたしが個人的に密かに尊敬しているアーティストであろうと、そうした申し出については「残念ながら　」とお応えするしかない。美術館は基本的にフィルムを収集しないのである。もちろん、シカゴ美術館の「アーヴィング　ペン　アーカイヴ」などのように現代作家でも例外的な扱いはあるし、十九世紀の写真黎明期の湿板　乾板などは写真美術館でも積極的に収集している。けれどもそれ以外、美術館がフィルムを収集することはない。なぜだろうか。

歴史資料館や博物館と美術館が違うのは、美術館とは作家主義を採って、あくまでもモノとしての「作品」を収集の対象としていることである。美術館では基本的にフィルムは「作品」とはみなされない。例えば写真家は　点の写真を創るのに様々な選択をする。撮影時だけでなく、コンタクト　シートのベタ焼きからどのイメージを選択するのか、プリントの種類や大きさ、焼きや階調、そして現代作品ではエディション　ナンバーや額なども含めて、そのイメージを観る人に最も効果的に訴えかけるために様々な場面で選択を繰り返す。そうした後に、最終的に仕上げられた　点の写真がモノとしての存在感をもって、美術館に「作品」として収められるのである。その場合、フィルムは重要ではあるけれども「素材」であって、「作品」ではない。残念ながら美術館ではフィルムを収蔵できない。

写真市場が成熟している欧米の場合、写真家の死後、遺されたフィルムは遺族や関係者がエステイトを設立して管理する場合が多い。フランスの写真文化遺産保存局や国立図書館などの例もある。写真は「作品」としてだけ価値を持つのではなく、時代を記録する貴重な文化遺産でもある。美術館とは発想を異にする「写真保存センター」の設立を願わずにいられない。

## ネガは貴重な「史料」

白山眞理（日本カメラ博物館運営委員）

九　六年に開催されたベルリンオリンピック大会では、「前畑ガンバレ」や「友情のメダル」など、今も語り継がれている名勝負が多数展開されました。

戦後の高度成長期に育った私も、これらのエピソードをどこかで聞いて知ってはいましたが、目の前にあるネガに前畑秀子の金メダルゴールの瞬間や西田修平と大江季雄の笑顔が写されているとわかったときには驚きました。日本カメラ博物館で所蔵している名取洋之助撮影ネガを調査していたときのことです。

名取がこのオリンピックを取材したことは、文献でもわかっていました。しかし、当時のグラフ雑誌に掲載されたのはほんの一部分でしたので、ネガ　コマ　コマを調べるまでは、彼の取材の全貌はつかめませんでした。日本選手の人間ドラマを追うカット数の多いことも、オリンピック後に妻とドライブして巡ったドイツ紀行の写真が未発表のままたくさん残されていることも、はじめてわかったことです。国家宣伝に利用されたオリンピック大会のことや、ナチスドイツの外国人ジャーナリスト規制など、考えさせられることの多い調査でした。

私が写真家や社会のさまざまな動きに思いを巡らせることができたのも、ネガが残されていたからです。ネガは、貴重な「史料」です。私は、ネガの保存を目指す「写真保存センター」の設立主旨に賛同いたします。

## 「日本写真保存センター設立推進連盟」発足によせて

山下洋一郎（アイデムフォトギャラリー「シリウス」チーフディレクター）

その時その時代の出来事を、映像として記録する最も小さな道具であるカメラとフィルムで写真が生まれ、その重要性は今更述べる必要もないほど、社会に認知されていますが、写真のネガ、ポジ等の原板について、写真が生まれてから約　六〇年経過しているが、何ら社会的に取り定めが行なわれておらず、撮影者本人に帰属したり、注文主が保管したり、いつしかその貴重な写真そのものが、散逸していても誰も気付かない状態である現状は誠に嘆かわしい様と常に思っていました。

しかしこのたび、日本写真家協会が中心になって「日本写真保存センター設立推進連盟」が設立され、写真原板の保存を進められることは、大変明るいニュースであり、まさに暗闇に　条の光が差し込んできたように思います。実施面では大変な困難さがあると思いますが、森山眞弓先生をはじめとする国会議員や美術、教育、写真業界の皆様のご尽力により、、官、学、写真家等で知恵を出し合えば解決できると思います。まず第一歩が踏み出せたことは大変喜ばしいことで、是非とも設立させ、早急に対処される体制が作られることを祈念いたします。

## 「文化」の証し

入江　観（画家　日本美術家連盟理事）

私は画家である。が、写真が好きである。その故か、「おまえの仕事は極めて写真的である」と言われることがある。写真的だという意味は、克明な写実という意味ではない。そういう写実表現には関心もないし、元々、そういう技術もない。殊更、意識してそうしたことはないのだが、どこか、切口に写真的なものがあ

るのかも知れない。

写真が、私の脳裏に残してくれたイメージには強烈なものがある。

作者の名前を思い出せなくても、射殺された瞬間の兵士の姿、筑豊の炭坑街の子供達、バーのとまり木に凭れる太宰治、砂丘に点在する人物、ワインの瓶を両腕にかかえた少年の笑顔、母親に抱かれて入浴する水俣病の患者、峨々たる雪山とそこから流れ出る氷河、等々。洋の東西を問わず、アトランダムに私の中に湧きあがるイメージに潜む写真の力とは何なのかと思う。

それは、唯、単に、無条件に美しいということに終わらないのは当然として、私たちが生きている、もっと深い部分に働きかけてくる何かがある。

写真は、間違いなく記録であり、それはとりもなおさず人間の記憶となり、思い出となる。思い出とは、単にそれを懐かしむ情緒的なものではなく、人々の現在を構築する生活の痕跡を言うのである。

昭和　十年代から　十年代にかけて青春期をすごした私にとって、戦後日本の様々な映像記録は、自分の内部に刻まれていた生きた証として、時代の記憶を、ゾクゾクするような思いで呼び覚ましてくれる。

そういうものを大切にすることを文化と言わずして、どこに文化というものがあるかと思う。

「日本写真保存センター」の実現こそ私たちの文化の豊かさを示すこととなるに違いない。

## 現代文化の書庫としての役割

奥田明久（朝日新聞社アサヒカメラ編集長）

私が朝日新聞社に記者として仕事を始めた　十四年前、会社に買うように命じられて写真機を手にした。

から写真の撮り方、現像　焼付けの方法を学んだ。そして、先輩たちの教えが初めて理解できた。その教えとは、「　枚の写真は、長行の記事より意味がある」。もちろん、新聞記事が無意味だと断言しているのではない。　枚の写真が読者に示す情報量は、記事のそれと同じぐらい多く、貴重であるということを言っているのだ。

私は主に、新聞と雑誌で事件を手がけてきた。リクルート事件、東京湾で起きた潜水艦「なだしお」の事故、オウム真理教事件、湾岸戦争、ペルーの日本大使公邸占拠事件など多くの事件　事故に遭遇した。当然、写真記者ではなかったけれど、紙面に私の写真を紹介したことは多い。そして、それらの写真が新聞社という機関に保存されているからこそ、写真の記録性が大きな意味を持つのである。

日本写真家協会が中心となっている「日本写真保存センター」設立に向けた運動を、大きなうねりとして発展させ、早期に実現を果たすことを切に願う。

伊奈信男氏は写真の記録性の重要性について、次のように記述している。「強い力と生気のある記録性があってこそ、写真は単なる複製や複写としての記録から報道力と説得力のある記録として、いわゆるマスコミュニケーションの大きな役割を果たすことができるのである。写真はその記録性によって、瞬間に失われるものを、永久に保存することができる。（中略）。写真はこのようにして、その記録性によって、『現代文化の書庫』たりうるのである」（「カメラ」　九五　年十　月号より）。このことは、保存する機関がないとしたら、写真が現代文化の書庫としての役割を果たせないということに、ほかならないのである。写真本来の意味を失わせないためにも、私たちが保存センターを設立できるかどうかの意味は重いのだ。

# 「写真」は人類の宝

黒部一夫（『日本フォトコンテスト』編集長）

写真雑誌の編集部には、毎月、全国のアマチュア写真家からじつに多くの写真が寄せられる。もちろんこうして編集部に届く写真は、国内で撮影されている写真のほんの　部であり、アマチュア写真家に限らず般の人々によって日常的に撮影されている写真は膨大なものである。

その時その場所で撮られた写真は、絶対唯　であり、過去に撮影された写真はもちろん現在に撮られている写真も、今後撮られるであろう写真も、それがどのような場面であろうと人類と地球の記録である。

この写真は時代を経ることによっていよいよその価値を増すのであるが、同時に時代を経るたびに貴重な写真が失われてきたことも事実である。撮影された写真原板やプリントは、だれかが保存し守らなければならない。でなければどんどん消滅してしまう危うさがある。では、だれが守るのか、個人なのか施設なのか。現在はほとんどの場合、プロ写真家もアマチュア写真家も個人が撮影した写真は撮影者本人が保管している。それがどんなに文化的、歴史的に価値のある写真であっても、個人が所有物として管理することは至極当然のことである。問題は、個人が管理しきれなくなった場合、どう保存するかである。特にアマチュア写真家の場合、本人に代わって他の個人が管理保存することはきわめて困難である。そうした個人が所有してきた写真を収集し管理保存する機関や施設が必要であることは、だれもが認めるところである。

人間の歴史を含めて地球の記録を残す最高の手段が、写真など映像であることは明白である。　枚の写真が持つ情報量の多さから見ても、記憶して正確に伝える手段として他に勝るものはない。写真は文化遺産であり、歴史遺産でもあり、いわば人類の宝なのである。

そうした「写真の価値」を理解するなら、写真保存のための機関や施設を設立することは、むしろ国家プ

ロジェクトとして公的機関が率先して推進すべきだと思うのだが、その対応にはもどかしさを感じる。ただ、この「写真保存センター」設立を　刻も早く実現させることがいかに重要であるかを考えると、早急に行動を起こし、ことを推進して行かなくてはならない。「写真保存センター」設立へ向けての準備調査費がやっと予算化されそうだとのこと。以前から（社）日本写真家協会が文化庁など各方面に積極的に働きかけをしてきた結果であり、その尽力には感謝するばかりである。

## 時代をとらえる真のセンターに

多田亞生（編集者）

写真原板の保存管理のありようは、写真家個人の個性がそのままに反映されるので、当然のことながら実態は千差万別さまざまになる。まして写真家本人が亡くなれば、その内容や意義を把握する知識や経験が十分にないままに引き継がれたり、それぞれの暮らしもあって、ゆきとどいた配慮が現実的に難しくなることもあり得る。やがては時の流れのなかで散逸したり、体系だった資料価値が減じてしまうことになるかもしれない。これでは原板が後世に活用されることもままならなくなる。

このたびのセンター構想が、委託を近現代のものにかぎり、「時代を色濃くとらえた」歴史的に貴重な写真原板を対象とすること、原則的に物故作家のすでに発表されたものにかぎるという枠組みにするならば、アーカイブとして利用価値は高いものになろう。

岩波書店の編集者としてほぼ四十年、奈良　京都の古社寺に現存する建造物　彫刻　工芸品　絵画　書跡などの国宝　重要文化財を写真で記録する仕事に携わってきた、今は亡き入江泰吉　坂本万七　薗部澄　辻

本米　郎　永野太造　米田太一郎　渡辺義雄などの諸氏も撮影にあたられた。「時代をとらえる」というよりも、むしろ激しく変貌する時代のなかにあって、千年余も変わらずにながらえてきた人為を記録することであった。文化財の所有者である寺と写真家と版元の当初からの合意によって、数万点におよぶカラーポジとネガ原板を版元が保存管理し、外部からの利用については所蔵者と著作権者の承諾をえて貸出し業務を日常的につづけている。

「岩波写真文庫」と同じように、このアーカイブは、今の若い世代には遠い存在であるかもしれない。しかしどのような時代にも可能なかぎり存続することに意義があると信じている。保存センターが写真文化財の保存については、既存の美術館や民間アーカイブの真の中心たらんこと切望する。

## 写真の生命力

小西治美（編集者）

編集者として『土門拳全集』を担当させていただいた。戦前に撮影された文楽のガラス乾板の密着帖を見たときの衝撃。小さなプリント一枚　枚が強烈な光を放っていた。

太平洋戦争のさなか、昭和十六年から十八年にかけて土門さんは文楽の撮影に熱中した。新橋演舞場と大阪四ッ橋・文楽座の舞台、楽屋、人形の頭、大夫から裏方まで文楽座に働く人々。ここに記録された黄金期の文楽は、人形も文楽座の建物も戦災で焼失した。

ガラス乾板は築地　明石町の自宅茶の間床下に埋められていたという。湿気のある地面に埋めて、どうして膜面が残ったのか不思議な気がする。長女の池田真魚さんの話では、ガラスがくっついてしまったものは

箱に入れて、戦後、密着を台紙に貼るときなどに重しに使っていたそうだ。相当な枚数が失われたろうが、現在　、〇　五枚が土門拳記念館に保管されている。

文楽に限らず、土門さんのネガは戦前の作品も含めて数多く残されている。グラビア印刷のためにネガ入稿していたことを考えると、驚くほどの残存率だ。恐らく、土門さんがそれだけご自分の作品に対して強い思いがあったのだろうと推察する。

また、入江泰吉さんは大阪大空襲で自宅を焼け出された。真っ暗ななか逃げ出すとき足にひっかかったものを持って出たら、文楽のフィルムが入った箱だった。それだけを持って着の身着のまま奈良に戻ったと、亡くなられた光枝夫人から伺ったことがある。

〇〇五年から　〇〇六年にかけて入江さんの生誕　〇〇年を記念し、奈良と酒田で　人展が開かれた。ことに土門拳記念館での展覧会では、勅使河原宏作の庭に面した展示室で左右の壁面におふたりの文楽作品が相対して飾られた。ソフトフォーカスの入江作品に対し、土門さんのはギリギリと絞った超鮮明なプリントで、写真の特質が　目瞭然だった。

奇跡的に残されたネガは、幸いなことにふたりの写真家の故郷に建てられた美術館で永く保存されることになった。平安時代の作品が多くの災禍をくぐり抜け千年の命を保ったのは、それ自体が生き残る力をもっているからという話を聞いたことがある。写真家の作品も同様だろう。写真自体の力があり、それを残そうとする自身の、また周囲の篤い思いが積み重なって保存されるのだと思う。

日本写真保存センターの構想の中には、このようにすでに写真美術館に保管されている作品も、将来的にはネットでつなぎ、代表作を閲覧できるようにすることが含まれていると伺った。そのために資料整理の基本フォーマットつくりがなされるという。各美術館が手探り状態で進めてきた整理　保存方法が確立されることは画期的なこととと、保存の先にあることにも期待したい。

# 日本の写真文化の発信地に

早川与志子（元日本テレビ事業局プロデューサー）

「素晴らしいプロジェクトじゃないの！他の国でも容易には出来ない大計画よ」　日本写真保存センター設立計画書の翻訳文を見ながら、アリソンが興奮気味に私に言った。アリソンは、アメリカのジョージ　イーストマン　ハウスのキュレーターである。

「日本の写真は、世界の写真史の中で重要な位置を占めているわ。このセンターの実現は国際的な意味があると思う」　好奇心　杯の瞳で私の肩を叩いたのは、デンマークのトーブだ。

〇〇六年十　月、チェコのプラハで、私はオラクル会議に出席していた。オラクル会議は、美術館やアーカイブなどで写真の仕事をしている人たちが集まる国際組織で、年に　度会員が大集合して、諸問題の討論、経験交流、情報交換を行う。

松本徳彦氏に頼まれて、海外の美術館やアーカイブに関する実態調査のお手伝いをしている私は、この会議を利用して、各国のプロたちに調査協力を依頼した。あまり期待していなかったのだが、予想以上の反応を示した人がたくさんいて、正直びっくりし、同時に、この構想が日本の写真を外国に紹介したり、国際交流展を企画する可能性を持っていることを認識した。

私は、この　月まで約十九年間、日本テレビで文化事業のプロデューサーをしていた。

父の職業の関係で小さい頃から写真に囲まれて育った私は、当然写真が大好き。展覧会の仕事に就いた時、最初に企画した展覧会が「マーガレット　バーク＝ホワイト写真展」、その後複数の写真展を企画　制作し、九九八年には世界初の「ピュリツァー賞写真展」を実現させた。卒業論文のつもりで企画した「地球を生

きる子どもたち」は、日本写真家協会にも大変お世話になった。

写真展制作の上で最も困難で重要な作業は、権利問題のクリアと写真の入手である。報道機関が所有する写真は　括交渉ができるので簡単だが、個人の写真家の場合は、写真の権利の管理や契約など写真家の代行業務をする組織がないため、個別に交渉しなければならず、その連絡先を探し当てることにまずかなりの時間や労力を使う。事前調査の段階で、写真の所在が不明、権利保有者が不明、連絡不能など、どうしても欲しい写真を断腸の思いで諦めたことは限りない。

写真は大衆的な文化で日常生活に定着しているのに、美術展と較べると、写真展そのものはまだ社会に馴染んでいない。展覧会の数を増やす必要があると思う。そのためには、実現しやすい条件・環境を作ることで、そのひとつが、権利問題をクリアできるシステム　機関の確立であり、日本写真保存センターの役割はまさにこれだと思う。そして、個人的には、日本の写真文化の発信地にもなって欲しいと願っている。アリソンやトーブだけではなく、世界がそれを待っているのは明らかである。

## 「日本写真保存センター」の設立を希求する

一木啓光（三木淳著作権継承者）

日本と写真の関わり合いは長く深い。

フランス人ダゲールが銀板写真法を発明したのが　八　九年、その　十一年後の　八六　年には上野彦馬が長崎に写真館を開くのである。

当時の国際社会において日本の置かれた地理的条件や流通の速度を考えてみると、これは驚異的なスピードといえよう。私は、この日本人の先取の気性に感動を覚えるのである。

その後の日本人の写真に対する関心は尽きることなく、今日では日本は世界屈指の写真産業大国であるこ

とは、自他共に認める事実であろう。

しかし、惜しむらくは、近年写真美術館等の設立はあるものの、多くの関心がハードウエアの方に向けられており肝心の写真に目が向いていない状況に、写真を愛する者として痛痒を感ずる。

我々は写真が人の心にうったえる力の大きさを知るべきである。　枚の映像に残された過ぎ去りし日々の日本の姿は見るものに己の過去を知り、アイデンティティを自覚させ、未来への展望を思索させる機会を与え得るものなのだ。愛国の念は教育でなく感動によって発心する。

私は　枚の写真にも、その力があると信じている。その機会を　人でも多くの日本人に授けたい。

今年は写真渡来より　四五年、先に世界初の写真美術館設立の誉を他国に数ヵ月の差で奪われた無念もある。機は十分に熟した。国家的文化事業としての「日本写真保存センター」の設立と価値ある写真の永久保存と展示を愛国の志をもって強く希望する。

## カメラマンの黒子としての責務

丹羽壽彦（銀　株式会社代表取締役社長）

カメラと写真が大好きな少年だった私は、当時、父親が趣味で持っていたカメラに憧れていた。家族旅行の際、父がそのカメラで皆の写真を撮ってくれたことが印象に残っている。誰もがそれぞれ精　杯の「いい顔」をしながら、楽しそうに写っていた。その頃の写真をずいぶんと探したのだが見つからず、記憶はおぼろなままである。

ただ写真というものは「今」しか撮れないものなのだと実感したことは、鮮明に憶えている。切り取るの

は「過去」でも「未来」でもなく、まさに今この瞬間のみであり、だからこそ貴重なのだということを、子ども心にも漠然と感じたのだ。その後、カメラマンになる淡い夢を見ながらも才能のなさを自覚し、カメラを売る側にまわってから、すでに五十余年が経つ。プロカメラマンの先生方の黒子として、ひたすらそのお手伝いをさせていただいてきた。

自分の店を開いたのは昭和一十　年（　九五八年）、戦後の激動の日本を撮り続けた著名な先生方をはじめ、多くのカメラマンの方が来店してくださった。世界中から買い付けた　流のカメラを求めて足を運んでくださる先生方は、皆とにかく「いい写真を撮りたい」という熱意と意気込みに溢れていた。折しも日本は高度経済成長の道をひた走り始め、昭和　十九年（　九六四年）の東京オリンピックを経てさらに国中が好景気に沸き、建設ラッシュで街は大きく変貌していった。それはほんの数十年前のことであり、また当時から今日まで常に写真の世界に触れていた私自身、そこに写しだされる時代の変遷を見つめ続けてきた。にも関わらず、あらためて当時の写真を見ると、現在との違いの大きさに驚きを禁じえず、記憶の中の像というものがいかにあやふやであるかを痛感する。ありふれた町並みや庶民の日常をとらえたカット、その　枚枚に、今となってはどれほど貴重な歴史情報が焼き付けられていることか。

今は亡き先生方のご遺族、また高齢となられた写真家ご本人の多くが、作品の写真原板の保存管理に頭を痛めていらっしゃると聞く。個人レベルの努力には限界があり、その結果貴重な記録が次々に失われてしまうことは、この国の文化財産の面でも甚大な損失となるだろう。

どんな名カメラマンも、過ぎ去った日を写すことはできない。こうしている間にも時は過ぎ、原板の専門的な保存管理を行うアーカイブスの創設はまさに急務であろう。半世紀にわたり、優れたカメラをご提供することで写真家のお手伝いをさせていただいた私だが、その結果生まれた数々の名作を後世に伝えるお手伝

いをすることも、また重要な責務だと考えている。

貴重な文化遺産を守り、その価値を社会に還元する「日本写真保存センター」の　日も早い設立を心より願っている。

## 待望の設立を祝う

田中　光常（社団法人日本写真家協会名誉会員）

日本写真保存センターの設立は、写真界に於いて画期的な事業として賞賛すべきものと思います。が〝時既に遅し〟の感無きにしもあらずです。日本写真家協会も創立五十六年を迎え、その間、物故された先輩会員諸氏も多くおられます。残されたその立派な作品の数々が散逸、焼却されてしまったものも計り知れない事だろうと残念に思います。私が動物専門の写真家を志し、日本写真家協会に入会させて頂いたのは昭和十四年でした。昭和一十七年～昭和四十　年まで日本野生動物記としてアサヒカメラに連載し、　○　種を掲載出来ましたが、その後、その中のトキ、コウノトリ、カワウソの　種が絶滅してしまいました。

原板は大切にロッカーに保管していましたが長い間に変色し、修正依頼したところ、コンピュータがまだあまり普及していなかった当時、　枚　○万円もして、それを何とか泣きついて一万円で修正して頂きました。変色しても、少々コストがかかっても修正し残して良かったと強く思っています。それ以来、日本の野生動物を記録しておくことが如何に大切か、特に天然記念物、特別天然記念物、或いは絶滅種、レッドデーター（リスト）に掲載されているものは勿論、日本の国土に生息する全ての野生動物も、いつ何時絶滅するやも知れません。せめて現在の日本の重要な動物の記録だけでも保存しておくべきと思い、大分前になりま

すが、水産会社の冷凍冷蔵工場　社を訪ねましたが、フィルム保管状況と魚類等の保管状況（湿度温度等）が全く異なるため不適とわかりました。次にアイスクリーム等の保管工場を調べたところ、これまた出し入れが多くないと生産価格に合わないとの理由で、保管だけでは無理でした。最後に重要書類を保管する会社のトランクルームへ行ってみましたが、保管湿度がフィルム管理には不適でした。そんなこんなで重要写真フィルム或いはプリント等保存保管の実現は時期尚早と　時棚上げとなってしまいました。

現在はデジタル化処理が進み、根本的に考え直さなければならなくなりましたが、写真保存センターに於いては、物故会員のみならず、将来は現会員の重要作品も広範囲に保存保管に取り組むことを希望して止みません。

## アーカイブという知的欲望

川田喜久治（写真家）

原板アーカイブという　つの知的欲望を思うとき、巨大なサイが私の頭をよぎる。森の不審火を消そうとする習性は、時代の予兆に反応する写真家の嗅覚や聴覚に類推され、犀利な感覚とはレンズの性質そのものである。大きな角は、かつて国家に啓蒙を促したドキュメント写真のシンボルとしてたくましい。鎧のように硬い皮膚は生きた化石となりつつ、ネガ　アーカイブのイメージと重なるのかもしれない。

時代を歩んだ作品は個人の手元からいつか離れるのは自明である。保存を捨て全作品ネガ破棄という考えもあろうが、あまりにも、消極的であるうえ独善的な香りがする。写真は見る眼のオリジナリティを拡げ、豊かな人間性と時間を超えた世界へとイメージを喚起する。人間の感覚と知性に絶えず働きかけようとして

くる意志的な写真のなんと多く、貴重なことか。私的な財産目録から離れ、ネガやポジ、ハードディスクに蓄積された祈りにも似た光りと影、激憤や平穏の考察的過去のイメージは新しい想像力のもとで、さらに普遍性を得て生きるのである。

それが歴史や文化に連なるとみずから言い切れないところで、日々シャッターを押し続けている私たちも確たるアーカイブをいまだ共有していないとは、見ることで生まれる知の源流をみずから絶ち、忘れ去ってしまうにもひとしい気がしてならないのである。それらイメージの集積となる原板保存センターの設立を一日も早くと渇望するのである。

## 調査研究委員会の設置は慎重に

熊切圭介（写真家）

或る時代の歴史的な事実や人間の生活、文化などを、事実に即して記録し伝える写真というメディアの持つ役割は、計りしれないほど大きいものがある。まさに文化遺産ともいえるが、写真家が亡くなるなど様々な要因で、貴重な写真原板が散逸したり失われたりしている現状を見る時、写真保存センターの設立は緊急の課題だ。日本写真保存センター構想は未だスタートの緒についたばかりで、これから解決しなければならない問題が山積している。その中で早めに考慮しなければならないテーマとして、調査研究委員会（資料収集委員会）の設置がある。委員会として先ず着手するのは写真原板の保存状態の調査であり、収集基準の策定だろう。歴史的に重要な文書や資料など公文書については、一年ほど前に具体的な作業を行うアーキビストの育成を目指し、日本アーカイブ学会が発足している。何時の時代のどういう資料を保存するのか。アー

キビストの役割は重要だ。そうした意味で、写真保存センターの根幹をなす調査委員会を構成するメンバーの特定には、慎重を期する必要がある。

最近、被爆直後の広島の惨状を記録した写真家、菊池俊吉氏のネガフィルムが、極めて良好な保存状態で現存していることが分かった。菊池氏の写真は原爆の惨状を記録したものに留まらず、敗戦直後の日本の姿を撮影した写真などで知られているが、今回新たに　九四五年十月　日から　十日までに撮影した広島の写真が、七八　点確認されたという。菊池氏の夫人が撮影メモと　緒に、銀行の貸金庫に預けていたようだ。恐らく、すでに発表された記録写真以上に貴重なネガも含まれている筈だ。菊池氏のように、遺族の方がしっかりと保存、管理しているという例は、多分極めて稀有なことだろう。大方は写真家が他界するとともに、ネガは散逸し失われることになる。そうした現状を考える時、写真保存センターの　日も早い設立のため、いま生きる我々は、積極的に設立運動に関っていく責務があると思う。

## 日本の写真文化遺産を永劫に

白川　義員（写真家）

私は自分の重要と思うフィルムは　井住友銀行本店の地下金庫に保存している。日本に原爆が落ちてもここが唯　安全と知ったからである。六年間の艱難辛苦の果てに完成した「アルプス」のフィルムを入れて十年後金庫を開いてみたらすでに色彩が半減していた。昔のカラーフィルムは退色が極めて早かった。しかしカラーを修復する作業など個人では当時金銭的に不可能であった。そして少し考えてみれば、私の写真などは浜の真砂の　粒で、写真が伝来して以来、貴重な文化遺産ともいえる写真が膨大にあって、それらが年月

と共に日々消滅していることは容易に想像できる。これは大変な事だと思った。

九七六年七月我ら日大写真学科の同級会いわゆる〝八会〟を北海道の旭川で開いて大雪山に登った。帰途は札幌で当時日大名誉教授で写真評論家として著名な金丸重嶺先生と　人になった席で、これらの文化遺産ともいえる写真を国家が収集保存する機関、センターのようなものを作れないだろうかと相談したのである。金丸先生は当時文部省の委員会の委員でもあった。返事は完全に否定的であった。「時期創唱だね、誰の写真を保存するかでそれこそ大騒動になるよ。それに今でも君は『地球再発見』理論で、若造に何ができるかと集中砲火を浴びている。止めたほうがいいよ」であった。私はそれで完全に口をつぐんだのである。

その後の私の仕事はすべて海外取材で日本にほとんど寄りつかなかったから、日本で何がどう進行しているのか皆目分からなかった。

先日帰国したら「日本写真保存センター」の資料と原稿依頼が来ていた。私の積年の思いが今、田沼会長や松本徳彦さん達のご尽力で現実に軌道に乗った事実を知りうれしいことこの上もない。時代の要請がやっと　十年昔の私の思いに追いついて来たという感慨がひとしおだ。日本における写真の文化遺産が未来永劫保存されるべきは当然の事でそれが今日の時代の要請なのである。

## 「文明の原像」を残す

野町和嘉（写真家）

十代半ばでサハラ砂漠を訪れ、大地のスケールと人々の強靱な生きざまに圧倒されたことが契機となって、辺境地域の文化と信仰を撮り続けてきました。これまで繰りかえし訪れた地域は、ナイル川流域、エチ

オピア、アラビア半島、チベット高原、アンデスなどで、いずれも厳しい環境のなかにあって、人々は深い信仰心を支えとして風土と調和しながら独特の宗教文化を受け継いでいました。

環境と宗教の枠組みについて、鮮烈な印象を受けたのはサハラでの体験でした。砂漠のオアシスに暮らす人々は、神がオアシスを与えて自分たちを住まわせてくれているのだという疑うことのない信仰を持っていました。イスラームの聖典コーランの描写そのままに、死の砂漠の真っ只中で、オアシスの存在そのものが神の慈悲であるわけです。

何世紀にもわたって風土と調和しながら受け継がれてきた辺境地域の文化は、いま激変の波にさらされています。いわゆるグローバリゼーションの浸透によって、地球上がアイロン掛けされた　枚のシーツであるかのように急速に平準化しつつあるというのが私の印象です。経済成長、あるいは急激な社会構造の変化によるコミュニティーの崩壊、観光化など様々な要因がありますが、私がこれまで記録してきた〝祈り〟のなかには、もはや原型を留めないケースがいくつかあります。

それらが、時代を超えて息づいてきた文明の原像であったことを心に留めておかなくてはならないと考えます。多くの写真家が、世界の今を記録し続けております。それらは世代を超えればかけがえのない歴史の記録として機能するはずです。それらを散逸から守り、世代を超えて広範に共有できる機関として、写真保存センターの設立が急務であると考えます。

# 今なら間に合う

木村恵　（写真家）

新しい世紀にはいるとともに怒涛のごとく猛スピードで技術革新の時代に入り、生活も経済も通信もそして写真もそれぞれの世界で大きく変化してきた。写真はいまデジタル化の波のなかで劇的な変化が起こっている。過去　七〇年の間、写真はゆっくりとした時間を歩みながら進歩発展しつつ時代を見つめ、歴史的な記録もしつつ表現としての写真と共に膨大な量の写真原板を残してきたが、長い歳月の間に日本の近代を写し撮った貴重な写真原板も散逸したり処分されたりして多くが消え去ってしまった。

残念ながらわが国には歴史的写真の原板を保存し管理する機構がなかったのだから致し方ないが、このままでは更に加速度的に散逸が激しくなるという危機感を抱いているときに「日本写真保存センター推進連盟」が発足したことは我々多くの写真人と写真文化関係者に強い力を与えてくれた。

そしてこの度、各界の著名な保存センター発起人の方々の努力と素早い行動力で文化庁より「日本の写真フィルムの保存活用に関する調査研究費」が国の予算に計上されたというニュースに大きな喜びを感じ写真保存センターの実現が緒についたことを実感させられた。戦後の混乱から立ち直った日本の社会をみつめ記録し続けた写真家も次々と世を去り、遺族も世代が替わり膨大な量の原板の維持保存に頭を悩ませているとの話を多く聞く今日、　刻も早く写真人は力を合わせ写真保存センター発足の行動を起こさなければならない。今ならまだ間に合う。写真家のみならず、学術研究者、科学者をも含め、文化遺産としての写真原板を如何にして収集し、保存し、活用するかを早急に、調査に着手し英知を傾け、　丸となって行動しなければならない。今からでも遅くはない。今なら間に合うのである。

# 未来への伝言

坂田栄　郎（写真家）

アメリカ元副大統領アル　ゴア氏から氏の著書『不都合な真実』を頂いた。地球環境の破壊の症例が紹介された写真の数々に、驚愕させられた。

今から百年前に撮影された、標高　、四一〇メートルの美しいスイス　ローヌ氏河に囲まれて建っている「ベルヴェデーレホテル」。そのホテルは今も同じ場所にあるが、周りの氷河が消えている。かつてローヌ氏河はローヌ谷まで延びていた。が、現在ではフルカ峠を下がったグレッチの　キロ程上流まで後退している。

アルプスのいたるところで同じ状況が起きているという。地球温暖化の問題がいかに深刻であるかが、たった　枚の写真から伝わってくる。いや、私には沈黙の風景が、未来への警鐘を鳴らしているように見える。

写真は時代の証言者と言っていい。一枚のローヌ氏河の写真の出会いによって、我々が直面している、この地球の危機を深刻に受け止める人も多いはずだ。移り変わりの激しい時代にあって、人々の暮らしは大きく変わった。もし写真を残していかなければ、風化させてはならない戦争や紛争の惨状や、悲惨な生活の記憶は徐々に人々の記憶から薄れてしまう。また、過去の文化さえも、後世に十分伝わらない可能性も出てくるだろう。

今、アーカイブスを設立する計画があるという。時代を映し出しているあらゆる分野の写真が「日本写真保存センター」に納められ管理されることは大変嬉しい。写真原板の保存は、未来を担ってゆく若い写真家への我々からのメッセージであり、沈黙の激励でもある。過去に触れることが出来なければ、未来への扉は開かない。過去を知ることは未来への飛躍につながる。私は、そう信じている。

# 瞬間はもう戻らない

中村征夫（写真家）

「日本写真保存センター」の設立には、心から賛同している　人です。今の日本の動向をみると、古き良きものが簡単に抹消され、どんどん近代化する　方です。それにより、貴重な財産を数多く失っていることに、とてもむなしさを感じています。

歴史の重みを感じさせる建造物、職人の減少、美しい自然もしかり、いずれも失ってはじめてその重要さに気づかされます。

有名無名の写真家たちが撮影された、膨大なフィルムは、それこそ歴史の証人として、後世にきちんとした形で残すべきでしょう。

モノクロームのプリントに浮かび上がる、昔の人々の暮らしぶりには、心が痛むこともありますが、つつましく暮らす、このような人々の苦労の上で、今の日本の幸せがあるのだなと、つくづく思わされます。

時代は急速な変化を見せ、　見、何もかもが便利になったようにみえますが、果たしてそうでしょうか。

デジタルカメラは次々と新機種が登場し、カメラに手がなじむ頃には新製品が登場します。プリンターやスキャナーも改良され、古い機種では思うようにいかないこともしばしば。それでも修理までして大切に扱うという意識を持っている人はどれくらいいるでしょうか。

物があふれ処分することが当たり前のように考える風潮がある昨今、残すべきものは何か、ということを、簡単に見失う恐れがあると、私は案じています。

我が国の、写真による歴史の証言者は、たとえ故人であられても、その作品は生き続けます。その時代時

代を切り取った、その写真の瞬間はもう戻らないのです。

「日本写真保存センター」の設立には、若い写真家たちも大きな希望を見出すことでしょう。時代を象徴する作品を撮って、いつかは自分の作品もと、皆、切磋琢磨し作家活動を続けることでしょう。それが、日本写真保存センターの設立とともに、我が国の写真文化にとって、大きな財産となっていくと思うのです。

## フィルムに記録されたイメージは文化資源

土田ヒロミ（写真家）

人類が文字を獲得して、数千年。それに比して、映像による記録や、表現を獲得したのは、瞬くほどの時間、　七〇年にも満たない。文字による記録や表現は、その永い歴史の中で、図書館などのデータバンクとしての保存集積のシステムを確立してきている。　方、この瞬くほどの時間、　十世紀を記録してきたのは、写真などによる膨大な映像であるといってよい。ある意味で、文字を凌駕している。写真集という印刷による保存は文字の文脈でなされてはいるが、そこに至る以前の膨大なフィルムの散逸が危ぶまれている。使用されなかった捨てカットは、埋没、消去への瀬戸際にある。このように表に現れず埋もれているものも含めては、フィルムによって記録されたイメージやデータは、文化資源ともいうべきものである。それらのフィルムから、今まで、読み取とろうとしなかった、もしくは読み取る必要もなかったデータが、今後どのような価値として浮上してくるか、予測することはできない。映像の特質として、何でもないような　枚の写真から読み取れる情報は、容易に文字では尽くせないボリュームを包含しているからである。この文化資産をどのように保存管理、運用するべきか、についての確かな方法論をわれわれは、見付け出していないが、今

やらなくてならないのは、散逸、霧散を急がねばならないことだ。
まず、われわれが記録、表現してきたフィルムは、文化遺産だという意識をわれわれ当事者が、しっかり意識化すること、そして無理解者にこのことを強く訴えていく努力を惜しんではならない時である。という私自身の事情は、と問われれば。部屋のあちこちに累積していくフィルムを前に、頭を抱えているばかりである。声高にもの言える資格などない。其の間にも、モノも身体も老化していく現実に狼狽しているだけである。衆知を結集して、この文化遺産を伝え、残していきたいものである。

## 保存センターの意義

中谷吉隆（写真家）

写真が誕生しての歴史は、他の表現分野である文学や絵画、音楽などと比べるとさほど古いとは言えない。しかし、カメラ　レンズ、フィルムやデジタルという機材によって、　瞬にして事象　現象を、いや時代を定着するという機能　特性は、多くの表現分野の遠く及ばないところである。
その時々に写された、人間の生活、動植物の営み、地球上のもろもろの事象から宇宙にいたるあらゆる写真は、時間が過ぎるにつれ人類にとって貴重な記録となってくる。時代の証言者となりうるのであり、数千年以前の人類の歴史を研究している考古学者の「この時代に写真が存在していたら」というつぶやきは、幾度となく耳にした。実証できる材料として適しているからだ。
日本において、いや世界中にこれほどまでに写真が普及することを、誰もが予測しなかったが、今日の状況は周知のことであり、記録写真即報道写真という狭いレンジではなく、写真表現の芸術性も高まっている

現状をふまえ、あらゆる写真分野の写真原板の保存は必要であろう。
カラーポジ、ネガ、モノクロネガ、プリント、デジタルデータ類での収集となるが、これらは写真文化として後世に繋げる役目を持ち、人類の発展に寄与することになる。当然ながら活用がなされることが重要である。
先日、ある国際フォトコンテスト審査のおりアメリカ、ヨーロッパ、アジアからの若い写真家たちと同席したが、写真保存センターの必要性を異口同音に述べ、写真産業世界　である日本は率先して行うべきだ、との意見もあった。まったく同感である。
写真産業王国から写真表現、写真文化への発展の時期にきていて、その意味からしても保存センター設立は大きな意義をもっている。

## 個人での保存の限界

常盤とよ子（写真家）

横浜のみなとみらい地区に　際聳え立つ横浜銀行本店の貸し金庫に、宝石や通帳を入れる替わりに、昭和十年代から抜粋したネガを保管しています。かなりな緊急事態の時でも、ネガは無事だと思っています。ところが預け主に異常があった時、どうなるのか、そんな不安にいつも駆られていました。
今回、写真保存センターの設立が計画され、原板保存の悩みが解消されて、しかも必要に応じて活用されるのはすばらしい事と、日本写真保存センターの設立を切望しています。

# 写真保存センターに期待して

富岡畦草（写真家）

戦後まもなく新聞写真記者になって、写真の本質は記録性にある。個人的にも社会的にも、後世役立つのは記録だけではないかと考えました。それならいっそ、記録を主眼に撮っておいた方が良かろうと割り切り、戦後の変化を記録してきました。そのうち、もっと効果的な記録写真の方法はないかと思案の末、思いついたのが〝定点観測式撮影法、略称定点撮影〟でした。

以来五十余年、私的な時間はすべて記録写真にあて、八十　歳の現在　十万駒に達しました。思えばそれは、悲惨な戦争体験に基づく、殉国の戦友への祖国存在の証明だったのです。そのため、原板の長期保存と散逸防止が絶対必要となります。しかし、前例が無いことでもあって、身近な公共機関に受け入れ体制が整っていません。わたしにとっては、死後の長期継続が念願なのです。

いたずらに日がたつ中、老いたるわたしの願いを理解し、娘が五年前とりあえず保存庫を建設してくれました。孫もその努力継続を約束してくれました。

その後まもなく当写真家協会でも〝写真保存センター〟設立の機運が起こり、正直、わたしはほっとしました。関係役員のご苦労には、心から感謝する次第です。完成の暁は、写真王国日本の存在が世界に認められ、貢献できるものと期待しています。

# 世界最古の写真は建築写真

高井　潔（建築写真家）

「写真保存センター」に国からの調査費が付いたと聞いた。いよいよ本格的に始動することになったということは、待望久しかった多くの写真家、文化人、編集者、学者などにとってたいへん喜ばしいニュースである。

世界で最初に撮られた写真は建物であった。　八　九年ダゲレオタイプの発明者フランス人ダゲールが写したもので、「パリの大通り」というタイトルのパリの街並みを写した写真である。もちろん当時の撮影は、感光材料に感度はなく、レンズも暗い、当然長時間露出での撮影ということになり、日中でも動く人物は写っていない。この時代の被写体としては長時間露出に耐えられる、最も写しやすいものが動くことのない建築物である。

日本でも、古くは上野彦馬、下岡蓮杖などによって外国人向けの日本みやげ絵葉書用として江戸城、日光東照宮、金閣寺、長崎大浦天主堂など神社仏閣が日本各地で撮影されている。

「写真保存センター」では、第　期として　九四五年から　九六〇年代の写真を収集するという、建築写真というと文化功労者渡辺義雄などの写真家の作品が対象となる、その後第　期、第　期と続くとのこと、息の長い仕事になる。

九六〇年代を迎えると六四年の東京オリンピックに向けて建築ラッシュ、続く高度成長期に入って列島改造が始まる日本国中の建物はすごいスピードで取り壊し、建て替えが進んでいった。当時の世相を写していた撮影者が亡くなるという問題もあるが、古い建造物が無くなっていくという現実は今日も続いている。

建築写真に限らず、写真の使命として記録と創造が求められている。特に建築においては記録写真という

ことが最重要といっても過言ではない。記録と創造、その目的とする方向は異なっているが、表現を通して、事実や意志を伝達するという点では、最終目的は同じである。

## 過ぎ去った時の記録は再現できない！

山口勝廣（日本旅行写真家協会会長）

写真が、時代の記録として歴史的役割を果たしてきたことは言を待たない。現在、日常的に写真は何時でも何処でも目にされるようになり、写真を眼にしない日はないであろう。それだけ写真文化が評価され、定着したといえる。

反面、その存在はあまりにも当たり前の情景となって、気にする人もいなくなってしまっている。日常的に手にするコンパクトカメラやデジタルカメラは当然として、携帯電話にも写真の記録ができるカメラ機能が搭載されている。このように、誰でも何時でも身近に写真が撮れる環境になり、その映像を見ることが出来るような時代が到来したことは、大変便利な時代といえるでしょう。

しかし、その便利になったと感じる感覚が、ともすれば、写された人物が目を瞑ってしまったとか、意に反した画像だと思えば、即座にその場でその映像を、安易に削除してしまうという現状がある。削除してしまえば、その映像を再び見ることは出来ず、撮影者本人が気付いていない時代背景や、そのときでなければ記録できない状況が雲散霧消する。現在なら撮り直しや撮り足しができても、過ぎ去って行った時間を記録することは絶対に不可能ということになる。

ここに、時代の記録である写真原板保存の本質的な必要性がある。

近年、優れた写真作品が、各地に設立された写真美術館や公共の美術館に収蔵、保存されるようになってきたが、これはプリントとして表出された作品に限定されており、貴重な写真原板の保存がされているわけではない。　コマ一コマに記録された、時代の証言者としての写真原板の保存のために、今、写真保存センターの設立が切望されている。願わくば、日本の歴史的写真記録の保存と有効利用のために、国立の写真原板保存施設の設立が必要であろう。

文化国家、写真大国日本の歴史記録保存は、人類にとってかけがえのない遺産であり、後生に残さねばならない証言である。写真原板が破棄されたり、消失、削除される前に！

## 「日本写真保存センター」設立賛同者（平成十九年一月現在　肩書き敬称略）

青松　秀幸　秋山　忠右　芥川　仁　安達洋次郎　APACHE　飯沢耕太郎　池田　真魚　石井　聖也
石川　文洋　石元　泰博　稲越　功一　稲村　節子　井上　光郎　今井　寿恵　入江　観　岩井　敏
岩橋　崇至　上野　一郎　植村　泰三　梅棹　忠夫　梅津　禎三　梅原　猛　梅基　展央　江口　友一
榎並　悦子　江成　常夫　大石　直臣　大石　芳野　奥田　昇　大島　洋　大竹　省一　大西みつぐ
大西　實　岡井　耀毅　荻島　孝之　奥田　明久　小澤　健志　小野　茂夫　小野　守男　影山　智洋
笠原美智子　柏崎　育造　梶原　高男　川口　邦雄　川島　環　川田喜久治　加藤　春生　加藤　佳生
金子　隆一　河村　建夫　鬼海　弘雄　菊池　徳子　杵島　隆　北尾　順三　北村　行夫　木之下　晃
木村　恵一　久保　走一　熊谷　元一　熊切　圭介　操上　和美　黒部　一夫　桑原　史成　河野　和典

小関与四郎　小西　治美　小西　祐典　小松　健一　古森　重隆　今駒　清則　齋藤　康一　斉藤　満雄
BAKU斉藤　佐伯　義勝　坂田栄一郎　佐々木　崑　笹本　恒子　沢渡　朔　篠山　紀信　志村　哲文
白川　義員　白鳥真太郎　白旗　史朗　白山　眞理　鈴木　育男　鈴木　和夫　鈴木　繁　鈴木　富夫
角　晃　関口　哲也　関　次男　妹尾堅一郎　高井　潔　高須賀豊重　高梨　豊　高野　弘
高橋　平　高間　新治　高村　規　竹内　敏信　田阪　友隆　多田　亞生　館石　昭　田中　光常
田中　康夫　棚橋　里子　田沼　武能　田村　和子　田村　民雄　丹野　章　茶谷　茂　塚原　琢哉
辻村　哲夫　津田　洋甫　土田ヒロミ　鍔山　英次　東松　照明　常盤とよ子　徳山　喜雄　富岡　畦草
内藤　正敏　中井　幸一　中川　茂夫　中嶋　好仁　中曽根弘文　中谷　吉隆　中西　浩　長倉　洋海
長野　重一　中野　雅陽　中村　征夫　中村吉之介　中村　太郎　奈須田恒雄　奈良原一高　那和　秀峻
西山　隆　丹羽　壽彦　野町　和嘉　野間佐和子　野村吉三朗　芳賀日出男　萩野矢慶紀　箱島　信一
鳩山　邦夫　英　伸三　早川与志子　林　義勝　原田　逸夫　樋口　肇一　平木　収　広河　隆一
吹田　文明　福井　勝義　福田　康夫　福原　義春　藤井　秀樹　細江　英公　細田　博之　堀内　洋司
本多　健一　牧野　俊樹　増村　征夫　俣木　盾夫　松井　嘉正　松木　和義　松野　崇　松村　明
松本　徳彦　宮村　成信　水越　武　水谷　章人　二木　啓光　御手洗冨士夫　宗雪　雅幸　森永　純
森谷　忠義　森山　眞弓　山木　道広　八木　耕一　柳澤　卓司　山岸　享子　山口　勝廣　山口　勝典
山口　百希　山崎　幸雄　山下洋一郎　山端　祥吾　与謝野　馨　吉田　努　吉田　隆志　吉田ルイ子
ロバート・ルイス　カーシンバウム　若林のぶゆき　渡辺　一雄　渡辺　澄晴　渡辺　良正　渡部　浩之
和田州生

# ●活動報告

1、「日本写真保存センター」設立発起人会

日時　平成十八年三月十四日（火）午後二時～四時

場所　赤坂プリンスホテル別館「旭の間」

出席　森山眞弓、与謝野馨、細田博之、鳩山邦夫、河村健夫（衆議院議員）、中曽根弘文（参議院議員）、福原義春（東京都写真美術館長＝代理鈴木省吾・東京都写真美術館副館長）、小沢健志（日本写真芸術学会名誉会長）、斉藤満雄（社団法人日本音楽著作権協会常務理事）、鈴木和夫（凸版印刷株式会社特別相談役）、御手洗冨士夫（キヤノン株式会社代表取締役会長＝代理永田圭司　キヤノン販売株式会社常務取締役）、田沼武能（日本写真家協会会長）、細江英公（会員）、芳賀日出男、田中光常（名誉会員）。

熊切圭介、竹内敏信、松本徳彦、木村恵一、桑原史成、山口勝廣、ＢＡＫＵ斉藤、高井潔理事（社団法人日本写真家協会理事）

（1）設立に向けての活動方針「日本写真保存センター」の構想案を検討する。

（2）運動の進め方を決定する。

①名称を「日本写真保存センター設立推進連盟」とする。

②代表者を森山眞弓衆議院議員（財団法人日本カメラ財団理事長）、副代表を田沼武能（社団法人日本写真家協会会長）。

③代表委員に細田博之、鳩山邦夫衆議院議員、福原義春東京都写真美術館館長、斉藤満雄社団法人日本音楽著作権協会常務理事、細江英公日本写真家協会会員。

④設立発起人全員を設立推進委員とする。

⑤当面の事務所を、社団法人日本写真家協会内に置く。

⑥当面の活動経費は、日本写真家協会の日本写真保存センター設立基金を充てる。

⑦事務局長を 松本徳彦（社団法人日本写真家協会専務理事）とする。

**2、設立構想案と調査研究予算案を提出**

五月二十五日（火）代表の森山眞弓衆議院議員と副代表田沼武能、松本徳彦事務局長が、文化庁高塩至文化部長、鬼澤佳弘芸術文化課長に「日本写真保存センター」の設立構想案と調査研究予算案を提出する。

**3、設立構想を記者発表**

七月十九日（水）午後二時～五時、ＪＣＩＩビル二階会議室で記者発表を行う。

出席　森山眞弓代表、田沼武能副代表、与謝野馨衆議院議員、斉藤滿雄、細江英公、福原義春（代理今村保雄、末吉哲郎）、俣木盾夫（代理江口友一）代表委員、芳賀日出男、田中光常委員、松本徳彦事務局長

取材　ＮＨＫ、共同通信社、朝日、産経、読売、下野新聞社、赤旗、日本カメラ社、日本写真企画、学習研究社、写真工業出版社、玄光社、映像企画、カメラ情報社、カメラタイムズ社、日本写真興業通信社、日本カメラ博物館、エトヴァスなど。

掲載紙　下野、読売、産経、茨城、岩手、東奥日報、神奈川、日本経済、朝日新聞、写真工業、ＣＡＰＡ、カメラ&フォト情報、写真文化、PhotoStage、ＪＣＩＩ ニュース。

**4、物故写真家の「写真原板」保管状況調査**

八月上旬　物故写真家のご遺族並びに著作権者に向けて、「写真原板」の保管状況調査を行う。主要な物故写真家のご遺族約百二十名に調査票を送付。

**5、文化庁予算案に計上**

八月二十四日（木）午後二時～三時、ＪＣＩＩ二階　理事長室

出席　高塩至文化部長、樋口聰芸術文化課課長補佐、森山眞弓代表、

高塩文化部長から「十九年度の概算要求に盛り込むことにしました」との報告を受ける。

林 忠彦「浮浪児」1946年

〒102-0082　東京都千代田区一番町25　JCIIビル
TEL:03-3265-7451　FAX:03-3265-7460
E-mail:info@jps.gr.jp
URL.http://www.jps.gr.jp/

社団法人日本写真家協会
JAPAN PROFESSIONAL PHOTOGRAPHERS SOCIETY